

essay

## 定方塊石、岡山県立美術館へ

関西学院大学博物館学芸員特別准教授 倉田 麻里絵

## 特別展「美と祈り—近現代日本美術にみるキリスト教」

関西学院に美術制作の専門教育機関はないが、卒業生のなかには在学中に画家を志し、その道で活躍した人たちがいる。多くは洋画や版画であるが、定方塊石<sup>さだかたかいせき</sup>（1882-1966、本名は末七郎、普通科卒）はキリスト教主題の日本画を遺した異色の画家である。定方が岡山県出身であることから、岡山県立美術館で開催された特別展「美と祈り—近現代日本美術にみるキリスト教」(2026年1月9日-3月1日)に、学院史編纂室所蔵の3作（《平和の基督》1930年、《宮潔めの基督》制作年不詳、《緑の野いこいの水辺》1940年）が展示された。

「美と祈り」展は、岡山県立美術館学芸課長・橋村直樹氏が2010年より同館で進めてきた調査研究のなかで、近代以降の日本美術におけるキリスト教絵画や、キリスト教に関連する表現に着目したことによって実現した。氏の専門はビザンティン美術であり、亡き恩師<sup>すずき みちたか</sup>・鐸木道剛氏が日本人初のイコン画家・山下りん（1857-1939）を研究していたという背景もある。西洋美術に学ぶことで形成された近代日本美術には、キリスト教の「信仰に根ざした造形や宗教的精神性に共鳴した表現」（本展図録 p. 1）が見られる作品がある。しかし、こうしたキリスト教的精神の影響を体系的に扱う展覧会は、これまでにほとんどなかったという。橋村氏は本展について「日本美術史における「広義のキリスト教美術」（キリスト教の影響をもとに生まれた表現）の可能性を提示することで、鑑賞者にさまざまな祈りのかたちを感じてもらいたい」と語った。

本展は時代順ではなく、「伝来と沈黙」「聖書と美」「歴史と応答」「祈りとかたち」「イコンと絵画」「土地とまなざし」という6つのテーマによって構成されている。終章の「土地とまなざし」は、キリスト教が教育・福祉を通して地域社会に浸透した歴史を有する岡山にゆかりのある作家の紹介であり、ここに定方が展示された。

## 定方塊石と関西学院

幼少期からキリスト教に接していた定方は、岡山教会の薇陽学院<sup>びよう</sup>に入学するが廃校したため、1896年に関西学院普通科に入学した。画家志望であることを当時の院長・吉岡美国に相談し、吉岡の紹介により京都の仏画家<sup>こせ</sup>・巨勢小石<sup>しゅうせき</sup>（1843-1919）に師事する。クリスチャンの定方が日本画でキリストを描きはじめてのは、巨勢の薦めであった。

キリストを描くことを決意した定方は、旧友の神崎驥一（当時高等商業学部長）と畑歎三（当時文学部教授）に薦められ、1922年より3年半、欧米に遊学しキリストに関する研究材料を求めた。その期間に日本から携えた《観音像》がフランスのサロン・ドートンヌに入選している。帰国後は依頼された「富士百景」の木版画を制作するなかで、日曜を《平和の基督》の制作に費やし、1年をかけて完成させた。本作は1931年に東京府美術館（現・東京都美術館）で開催された二科展主催の第2回日本アンデパンダン展（3月1日-20日）に出品されたのち、同年4月に教育と吉岡に対する感謝の意を表して関西学院に寄贈された。

寄贈後は図書館（現・大学博物館）の踊り場に掛けられていたが、戦時下にインクで汚損されたようである（『関西学院新聞』1951年4月20日付）。当時は額装されていたため、おそらく本紙はガラスによって守られたのだろう。修理の記録がないため詳細は不明であるが、軸装された本作は1983年より学院史編纂室に収蔵されている。このほか学院史編纂室には、かつて中学部の講堂に掛けられていた定方の《富士山麓山中湖キャンプ風景》（1951年）という作品もある。富士を背景に制服姿の少年たちが輪になって祈る様子が描かれている。

定方は『関西学院新聞』の校地移転1周年記念号（1930年6月25日付）に「私の一生の事業は画家で神意を顕はす事」「筆で神意を顕したい基督を絵きたい」（原文ママ）と意気込みを寄せている。定方の作品の多くは東京大空襲で焼失したが、「美と祈り」展では、仏画家の巨勢との関係を想起させるような仏教図像を引用したキリスト像も紹介された。定方の再評価がはじまっている。

（くらた まりえ）



「美と祈り」展で展示された定方作品3作（学院史編纂室所蔵）